



## ロータリーの心を増やそう

国際ロータリー第2510地区

2010-2011年度 ガバナー **佐々木正丞**

(札幌RC)

本年度のレイ・クリンギンスミスRI会長が提唱しているロータリーとは何かについて少しばかり考えてみたいと思います。

現代はかつてないグローバル化、高度情報化の時代といわれております。インターネットなどの地球的規模での通信ネットワークの形成が目ざましい勢いで進んでいることはご周知のとおりであります。

アジアの東端の日本から遠く離れた地中海のギリシャで財政破綻をきたすと、瞬時のうちに、その情報が世界中を駆けめぐり、国際的な金融市場、為替相場の攪乱がもたらされるという事態に直面しています。

また、現代は、百年に一度ともいわれる大不況に見舞われているといわれ、バブル崩壊、サブプライム・ローン、リーマン・ショックなど次々と深刻な経済問題が発生しており、「強欲資本主義」という言葉まで現れる有様です。

かつて、ポール・ハリスが荒れすさんだシカゴで悩んでいた頃にどこか似ているような気がしてなりません。

このような時代状況の中で、私たちロータリアンの重要な理念の一つである「職業奉仕」との関連で、当然問題となる「職業倫理（職業義務）」について、あらためて再考することも無意味ではないと思われまます。

残念ながら、今日の企業社会では、その「職業倫理」に反して、脱税、不正経理、不正取引などが後を絶ちませんが、この「職業倫理」を改めて問いただすとき、思い起こすのは、前世紀初頭活躍したドイツの社会学者、マックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」であります。このなかでウェーバーは、近代の資本主義を生み出した精神的な原動力を「プロテスタンティズムの倫理」に求めています。

禁欲的な、まさに反営利的な「プロテスタントの倫理」が、古い、伝統的な高利貸しや金融業者を抑制しつつ、他方では節約と勤勉によって新しい生産力の発展をもたらし、その倫理の担い手となった「産業的中産者」が私欲のためではない、強い隣人愛の実践として一生懸命仕事に励み、安くて良い物を市場に供給することにより、近代的で合理的な市場・価格メカニズムの形成をもたらしたのだとされています。

こうして、禁欲的で合理的、近代的な思考と行動が近代資本主義の形成にとって大きな推進力となっていった訳であります。問題は産業革命以降、資本主義経済体制がひとつのシステム、機構として一旦確立されると、資本主義の機構そのものが人々をその論理のもとに強制し、人々はより強い営利欲に支配されるようになります。こうなると、資本主義の形成に大きな役割を果たしたあの倫理は存在意義を失い、無用のものと化してしまいました。貪欲に利潤を追求し、その極大化をはかる資本の論理が台頭し、そこには、あの資本主義創出期の「産業的中産者」の良い物を安く、という、実践的な倫理や精神は喪失されてしまうことになってしまったのであります。

現在の世界の経済情勢は、自己中心的で利己的な考えや行動に支配されているということは、誰の目にも明らかです。

ロータリーの第一の標語は、「超我の奉仕」という非利己的な、すなわち利他的な精神が基調になっていますが、この精神は、資本主義形成の精神的基盤であった「プロテスタンティズムの倫理」に相通ずるものがあるように思われます。

今月は、会員増強月間です。ロータリーの心をつかち合える友を仲間に迎え入れようではありませんか。そして、世界をより良い場所に変えようではありませんか。